

防災世界子ども会議

Natural Disaster Youth Summit NDYS

デジタル時代の国際防災教育

- 阪神・淡路大震災から 30 年。高校生からの提言 -



2025.6.1

防災世界子ども会議実行委員会

デジタル時代の国際防災教育

- 阪神・淡路大震災から30年。高校生からの提言 -

神戸市立葺合高等学校 茶本 卓子

京都大学防災研究所巨大災害研究センター 中野 元太

「防災世界子ども会議 2025 in KOBE」実行委員長 岡本 和子

近年、気候変動による自然災害が激甚化する中、地球規模での防災意識の醸成を図ることは、今までになく重要になっている。「防災世界子ども会議」は、国際協働学習を通して、防災について考え、課題解決に取り組むことにより、災害に強いまちづくりを担う、未来の市民を育成することを目的に活動してきた。この度、この活動の20周年に至り、これを記念する特別企画として「2025 in KOBE」を開催。神戸市の高校生が国内外に向けて活動発表・ディスカッションを行った。国際協働学習にフォーカスした国際防災教育を通して、変動するグローバル社会に貢献できる人材の育成を目指している。

阪神・淡路大震災の教訓 災害リスク軽減 国際協働学習 国際防災教育 国際防災デー2024

1. はじめに

「防災世界子ども会議(NDYS: Natural Disaster Youth Summit)」は、阪神・淡路大震災から10年、神戸での第2回国連防災世界会議 パブリックフォーラム(2005年1月)参加を機に始まった、iEARN(アイアーン)プロジェクトである。



「NDYS 2005 in ひょうご」 宣言文の採択

2005年3月、プロジェクトの成果発表として、第1回「防災世界子ども会議 2005 in ひょうご」国際会議を開催。世界11の国・地域からユースが集い、防災について学び合いながら「今日を防災について考える出発点として、防災について学び、感じ、共有しよう!」という宣言文を採択した。世界で起きている災害による被害を、世界のユース間の交流・協働学習を通じて、軽減し、未来の災害から人々の命を守るプロジェクトとしてスタートした。

2025年3月、多くの方々のご尽力を賜り、この国際会議が20年目を迎えられたことに心からの感謝を申し上げたい。

2. 防災世界子ども会議 ロードマップ

国際枠組と関連付け、持続可能で災害にレジリエント(強靱)な社会に貢献する人材育成をめざして取り組んでいる。

これまでに世界65の国・地域の学校・チームが参加している。

本稿では2025年3月22日開催の「防災世界子ども会議 2025 in KOBE」について報告する。

3. 目的と方法

阪神・淡路大震災から30年、防災世界子ども会議設立20周年を記念した「防災世界子ども会議 2025 in KOBE」を、神戸市立葺合高等学校を会場として、3月22日にハイブリッド開催した。



図2. チラシの表面

4. 活動内容

4-1 成果発表会概要

事業名：防災世界子ども会議 2025 in KOBE

日時：2025 年 3 月 22 日

会場：神戸市立葺合高等学校（ハイブリッド開催）
タイトル：阪神・淡路大震災から 30 年。高校生からの提言 ユースがつなぐ「防災の未来」

会場参加者：60 名

オンライン参加者：世界 10 の国・地域から約 100 名

発表者：世界 6 の国・地域（マレーシア、台湾、ジョージア、オマーン、インド、日本）の学校

4-2 実施内容

4-2-1 第 1 部：設立 20 周年を祝って

会場に NDYS-OB/OG が 20 周年のお祝いビデオメッセージを寄せてくれた。「ユースがつなぐ『防災の未来』」をめざして、新たな一歩を進んでいく。



図 3. 祝ビデオメッセージ：中野 元太（京都大学防災研究所巨大災害研究センター 准教授 NDYS-OB）

4-2-2 第 2 部：活動発表&ディスカッション

阪神・淡路大震災の経験・教訓を国内外の「次世代」へつなげよう！

4-2-2-1 ◇阪神・淡路大震災から 30 年。高校生からの提言

神戸市立葺合高等学校国際科の生徒 6 名は、阪神・淡路大震災の教訓を活かした防災活動の成果を、国内外に向けて英語による発表をした。

研究経過報告：

2024 年 4 月から、6 名は阪神・淡路大震災の教訓を活かし、自然災害に強い社会を創るためのヤングリーダーやサポーターになるための方法について、データ収集と調査に乗り出した。国際的な防災教育発展の礎となった阪神・淡路大震災で起こった出来事を忘れずに、そこから学んだ教訓を活かし、日本の災害時の状況を改善し、地域防災としての南海トラフ大地震に備えなければならない。



図 4. 神戸市立葺合高等学校国際科 2 年 グローバル・スタディーズ 防災チーム

2024 年 7 月、「阪神・淡路大震災から 30 年を迎えて キックオフ！」として、オンラインで「2024 in KOBE」を開催。世界 8 の国・地域の NDYS スクールの生徒は、パソコンやスマホの画面に向かって、エールを送りあった。



図 5. 「キックオフ！」オンライン写真撮影

2024 年 10 月 13 日、「国際防災デー2024 に寄せて」として、阪神・淡路大震災から 30 年。高校生の提言 ユースがつなぐ「防災の未来」をタイトルとして、#DRRDay のハッシュタグで、国際防災デー2024 に参加した。

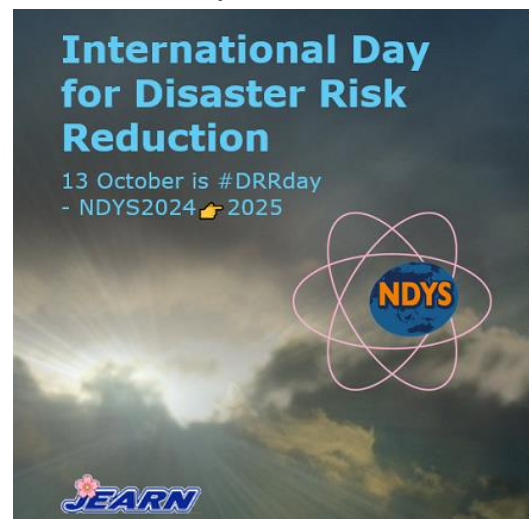


図 6. 国際防災デー2024 に寄せて

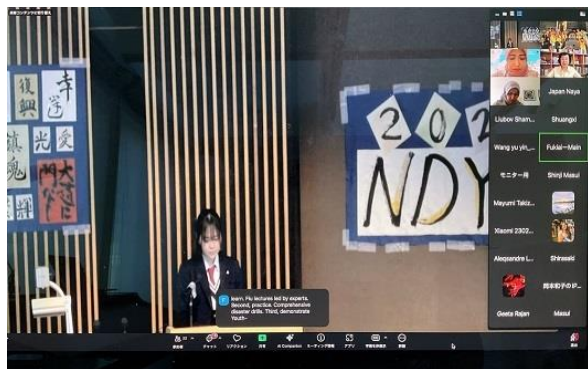
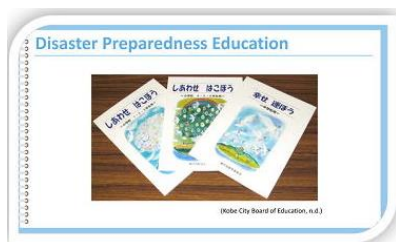


図 7. 神戸市立葺合高等学校の生徒による
英語による国内外へ向けての発表



多くの防災の
専門家の助言
をいただき、
学びを深めて
いった。

2025 年 3 月、阪神・淡路大震災から学んだ教訓を活かし、災害関連死を防ぐための対策や備え、避難所における社会的な不平等の改善、地震発生時の被害軽減に向けた自助と共助の強化をめざしてなどを課題として研究の成果を発表した。そのまとめとして、地域防災を高校生が主体となって運営する活動を「LPD：防災プロジェクト」と名付けて提案した。

4-2-2-2 ◇特別講演：スマトラ地震・インド洋津波から20年

阪神・淡路大震災からの学びを生かした活動報告 インドネシア・アチェの「Build Back Better (より良い復興)」



図 8. 講演者：ウイザー・プトゥリ・メララトゥナ

「防災世界子ども会議 2005in ひょうご」国際会議で、バンダ・アチェの高校生としてインド洋津波の報告。マリクサレ大学 NDYS-OG

4-2-2-3 ◇世界のユースとディスカッション



図 9. 英語によるディスカッションの司会

1) 各国で行われている自助・共助の対策

- ・小学生が防災イベントでポスター発表をして、地域の住民に呼びかけている。(台湾)
- ・防災教育をカリキュラムに入れて、必修にすると良い。(オマーン)

- ・阪神・淡路大震災の日生まれた子どものエピソードを、神戸市の絵画教室の生徒たちが絵本にこめて発行することで、多くの人が災害について学び、考えるきっかけになっている(神戸)

2) 国際防災の観点からユースが国を超えてできること

- ・日本の提案・ハッシュタグを通じた情報共有
例 #YouthInAction
他の国のハッシュタグ案 #DisasterFree

- ・マレーシア・オマーンからの提案：オンラインで防災教育の機会をもつ。いち早く災害対策先進国の取り組みを学び、意見交換をすることで、自国の防災活動を改善できるなど。

4-3 震災30年 記念ミニ・大正琴コンサート



図 10. 「こころのケア」として音楽発表
世界7の国・地域のユースによる大正琴コンサート
自然災害から人々がこころの復興を助けるために、音楽は有益な働きをすることができる。

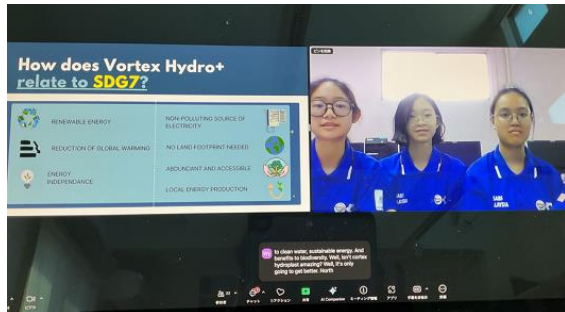
4-4 世界5の国・地域からの活動発表

テーマ： 気候変動に立ち向かう 持続可能な社会
の創り手となる

4-4-1 洪水に対する革新的な解決策「The Vortex Hydro プロジェクト」

マレーシア (SMK、スルタン アブ バカル、クアンタン、パハン州)

マレーシアでは、洪水が毎年起っている。洪水による水を飲料に適した水にしたうえ、発電までおこなう The Vortex Hydro+について説明する。



4-4-2 台湾の小学校における防災教育

台湾（双溪小学校、朴子、嘉義市）

学校での防災訓練の様子など、台湾の小学校で行われている防災教育について具体的に紹介する。



4-4-3 ジョージアでの協働プロジェクト

- NDYS での 15 年

ジョージア (iEARN Georgia、トビリシ)

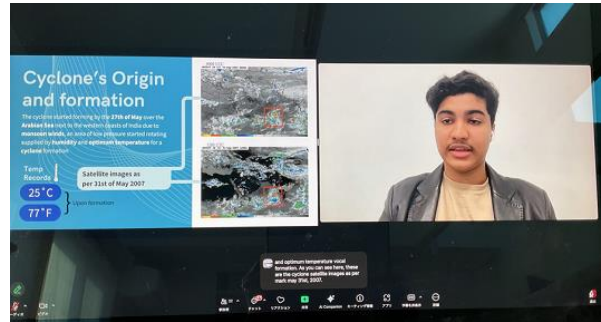
洪水や火山噴火など様々な災害があることを紹介。被害を少なくする方法についても述べる。



4-4-4 サイクロン ゴムの影響

オマーン (My School、高校、マスカット)

気候変動の影響により、サイクローンの巨大化が
起こっており被害も甚大となっている。気候変動
に対する、アクションが必要。



4-4-5 インドの自然災害

インド（セント マークス高等中学校、ミーラ バグ、ニューデリー）

学校で行っている防災教育の紹介および地域社会
に対する防災活動も報告



4-5 NDYS 2025 宣言発表

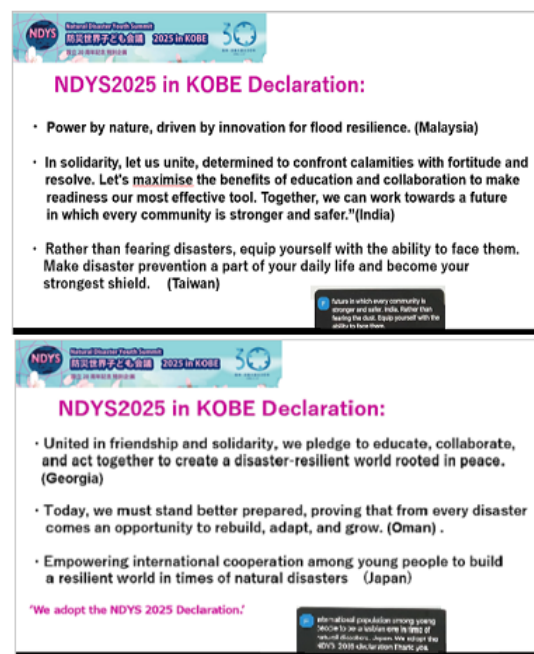


図 11. 各チームからの宣言文の読み上げ

4-6 「しあわせ運べるように」合唱



図 12. マレーシアの生徒の防災活動
プロモーションビデオが流れて

阪神・淡路大震災がきっかけで生まれ、復興を願って歌い継がれてきた「しあわせ運べるように」を、スクリーンを見ながら歌った。

* 閉会後の集合写真（会場+オンライン）



2025. 3. 22 撮影

* 参加証明書の発行

「NDYS 2025 in KOBE」に参加・発表の世界6の国・地域の学校（生徒約100名）へ参加証明書を発行。



* マレーシア

2025. 4. 7 受信

5. 成果と課題

5-1 成果

①世界各国・地域から参加した生徒は、異なる文化のもとで行われる防災活動に目を向け、自国の活動の特徴を理解し、新たな気づきを得た。ま

た、国を超えて協働することで、それぞれの国・地域で活かせるような解決策を見つけることができると、学習に向かう気持ちを高め、主体的な学びにつながった。

②NDYS 設立 20 周年の節目に参加することができ、阪神・淡路大震災の教訓を活かし、今後さらに起こりえる甚大な自然災害の切迫性を感じて、防災の重要性を再認識した。生徒は自助力を身につけ、共助力を高め、地域の人々の命を救う活動に、もっと積極的に取り組む責務を感じた。

③葺合高校の生徒が、英語で発表や意見交換をすることで、国内外に防災の重要性を発信することができた。

④葺合高校の生徒は、1 年間かけて健康・人権・教育の視点から「防災」の問題を探り、各自がテーマを決め課題研究にとりくんだ。「防災世界子ども会議」で発表し、ディスカッションに参加し、その後も各国の生徒に質問を送る関係を築くことで、国際防災の視点からも自分の研究を高めることができ、論理的思考力やコミュニケーション能力の育成につながった。

5-2 課題

①プロジェクト開始から 20 年、英語を国際共通語としての国際協働学習をめざしてきた。今年は念願であった、生徒による司会進行及び海外の生徒とのディスカッションを行うことができた。今後このようなコラボレーション活動を発展させ、プロジェクトを継続できるかが課題である。

②英語力はグローバル社会を生きるわが国の子どもたちの可能性を大きく広げる重要なツールである。英語の授業のカリキュラム改善や生徒が英語力を活かせ、発表や意見交換ができるグローバルな学びの場を充実させていくことが重要である。

③学校の施設設備の使用可能な日程と人的配置の関係で、開催時期が 3 月下旬の土曜日になった。年度替わりの時期であったため、校内での運営関係者と生徒の参加者を多数集めることが出来なかった。

④20 年を経て、この取り組みに参加した生徒たちが、その後、どのように成長したのかについての十分な検証ができていない。今後は、長期的な視点で調査を続けていくことが必要である。

⑤海外の取り組みから学び、互いに協働で国際防災の対策を深める時期にきている。各国・地域の最新の取り組みを学び、正しい情報を共有し、ユースが意見交換できるような、国際防災発展の仕組みづくりを防災の研究者を交えて進めたい。